

## グローバル化社会における共生と共感

遠藤由美 (関西大学)

### Empathy and living together in harmony in a globalized society

Yumi Endo (*Kansai University*)

(2015年3月1日受稿, 2015年5月14日受理)

Empathy is a source of altruistic behavior by offering kind help for people in distress, and so regarded as a good thing, sometimes a precondition of morality. Empathetic friends and family doubtlessly make us feel warm. It does not follow, however, that empathy is prosocial. Society where we are living now is globalized one big society with a goal of living all together in harmony, including not only people in intimate sphere but dissimilar others from different groups. We would ask how empathy works and what effects of it are in this modern social context. It is discussed that intergroup empathy bias may enlarge conflicts between groups and empathy directed toward in-group victims potentially changes into angry and violence against enemy, even into the vicious cycle of violence.

**Key words:** globalized society, dissimilar others from different groups, living together in harmony, empathy, intergroup empathy bias

近年、「共感」に対する関心が高まりを見せている。de Waal (2010 柴田訳 2010) の著書『共感の時代へ』というタイトルはまさにそれを現わしているかのようだ。この本についてある紹介文は次のように述べる<sup>1</sup>。

利己の動機と市場の力のみによる現代の競争社会は、富を生み出すことはできても、人生を価値あるものとするような相互信頼は生み出せない。「共感」こそが混迷の現代社会を救う。これは、人間の優しさの生物学的ルーツについての大切なタイムリーなメッセージだ。

つまり、行き詰まりを見せている極端な利益優先社会を、進化的には乳類に共通の特性である共感に基づいたやさしい社会へと変えて行こう、との提言をおこなうべく著わされた本だというのである。我が国では、東日本大震災後の孤立感喪失感や被災した人々への思いから一時「絆」という語が頻繁にメディアに登場し、人々のつながりと助け合いが希求された。

『共感によって、社会的きずな（結束性）が築かれ、集団に対する帰属意識が育まれることにより、生命の安全が保証され』（梅田, 2014, p. 8）るなら、さまざまなひずみが生じている現代社会を、共感を通して人と人が手を取り合うやさしさに満ちた生きやすい社会へと改革することができるのではないか。共感に対する関心と期待が高まっている背景には、アカデミック

<sup>1</sup> de Waal, F. (2010). *The age of empathy: Nature's lessons for kinder society*. Random house. (柴田裕之 (訳) (2010). *共感の時代へ* 紀伊國屋書店)

Amazon上に記載されているD. Morrisの紹介文。

<http://www.amazon.co.jp/%E5%85%B1%E6%84%9F%E3%81%AE%E6%99%82%E4%BB%A3%E3%81%B8%E2%80%95%E5%8B%95%E7%89%A9%E8%A1%8C%E5%8B%95%E5%AD%A6%E3%81%8C%E6%95%99%E3%81%88%E3%81%A6%E3%81%8F%E3%82%8C%E3%82%8B%E3%81%93%E3%81%A8%E3%83%95%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%82%B9%E3%83%BB%E3%83%89%E3%82%A5%E3%83%BB%E3%83%B4%E3%82%A1%E3%83%BC%E3%83%AB/dp/4314010630>. (2014年12月17日).

ただし、英語版の紹介文（オリジナル版の出版元のRandom HouseのWEBサイト）は、これとはやや異なるが主旨はほぼ同じと理解したため、ここでは日本語による紹介文を紹介した。

Random House *The age of empathy*.

<http://www.randomhouse.com/acmart/catalog/display.pperl?isbn=9780307407771> (2014年12月17日).

Correspondence concerning this article should be sent to: Yumi Endo, Kansai University, Suita, Osaka, 564-8680, Japan (e-mail: endoy@kansai-u.ac.jp)

世界と一般市民の世界の双方において、このような理解があるように思われる。

共感という語は確かにあたたかなイメージを伴う。苦境にあるときの重苦しい気分、事態を変えられない焦燥感、先が見えない不安、これらの真只中にあるとき、「そのつらい気持ち、よくわかるよ」と言ってくれる人がいるだけで、たとえ現実の事態は何ひとつ変わらないとしても、自分とその人との間で心が通い合いあったと確信して救われ、立ち上がるだけの勇気が湧いてくるように感じる。おそらく多くの人がこのようなことを経験しているがゆえに、もしこれが広がり浸透したなら、人々がお互いに手をさしのべ合う優しい社会が実現できるかもしれないという想像に至るのはごく自然なことである。

哲学や心理学、教育学などの研究者の多くもこれまで共感を基本的に望ましいものと考えてきた。古いところでは18世紀にA. Smith (1759 高沢 2013) が『道徳感情論』において、他者の幸福を求めるのが人間の本性であり、共感はそのを支えるものだと論じた。共感には向社会的行動の起点となり (Eisenberg & Miller, 1987)、互恵的愛他性を支える (Preston & de Waal, 2002)。それゆえ、道徳教育の目標の1つとして共感性や社会性の育成が掲げられ (e.g., Hoffman, 2000; 川崎, 2009)、個々人の共感能力を高めることを通してよりよい社会の構築が目指されたのである。特性レベルの共感あるいはある状況における共感状態が向社会的行動を媒介することを示した研究は実際数多く存在する (e.g., Batson, 1991; Eisenberg, Spinard, & Sadovsky, 2006; Hoffman, 2000)。

共感に関する研究は近年増加の一途をたどっているが、これまでのところ統一的な共感の厳密な定義は確立しているとは言いがたい。そこで、多くの研究者は合意のとれた定義がないことをまず述べ、ある定義に立って議論をスタートさせる (Coplan, 2011) のが定石となっている。本稿もこれにならい、共感をさしあたり「他者の感情状態の理解から生じる感情的反応」(Eisenberg & Strayer, 1987)、「他者の福祉状態を志向するような他者の感情への反応」(Batson, 2009) としておこう。すなわち、他者が負傷していることに気づいたなら、その人に肯定的関心を向けさぞ痛いだらうと思ひ、その痛みを身体反応を伴う自分の感情として感じとり、他者のために何かをしたいと他者志向のケア行動へと動機づけられる。

Batson (2009) は共感研究における錯綜する議論を整理しようとする試みにおいて、①他者が何を考え感じているかを人はいかに知るか、②他者が苦境にあることへの思いやりやケアはいかに生じるか、の2つの問いにまとめている。元来この2つの疑問は相互に関連したものであるが、どちらかにより大きなウェイトを置いている研究も多々存在する。たとえば、神経

科学的アプローチをとるメカニズム研究は主として①の疑問に、苦しむ他者を見ることが自分の中に苦痛を生じさせるという研究 (e.g., Krebs, 1975) や前述のde Waalらによる比較行動学的研究などは②の疑問に向き合おうとしたものだ、というのである。これまで個々の研究者が提起した多様な問題のあり方を整理し、それらを関連づけるうえでこのまとめは有効である。

しかし、共感を考えるということはこの2つの疑問に集約されるだろうか。筆者の回答は否である。共感の研究に登場する他者は特に制約が設けられず、デフォルトとしてただの他者、あるいは無色透明の他者であることが多い。Batson (2009) も上記の①と②で、「他者」については何も説明せず、何も条件を付記していない。だが、文字通り自分自身以外の人間を他者と呼ぶにしても、すべての他者—地球の人口を70億人とすると、[70億-1] 一人がその人にとってすべからず等価であるわけではない。他者は自己との関係において、自分が責任をもつ他者から無関係の他者さらには自己の存在を脅かす敵としての他者に至るさまざまな意味をもつ者としての姿をとる。ならば、共感を考える際に如何なる他者の心はいかに知るか、如何なる他者の苦境にケアが生じるか／生じないかを問う必要があるのではないか。そしてさらに、如何なる他者と如何なる関わりをもつかは、社会のあり方によって規定されるがゆえに、人々が生きている社会はいかなるものかを問うことが必要ではないか。

社会的認知研究はこれまでに、人が他者を見るときに基本的傾向を明らかにしてきた。たとえば、社会的地位の高い者は必ずしも相対的低地位の他者を知ろうとして注意を注いだりある固有の考えや感情をもった個人として見るとは限らず、しばしば相手を非個人化することを示唆してきた (Fiske, 2009)。また対人認知では、一般に他者に対して好意感情と能力の2次元からとらえる傾向があり (Cuddy, Fiske, & Glick, 2008)、中でも好意感情次元が優位であり (Singh & Tor, 2008)、自己と他者の関係によって他者の知覚の仕方が異なることが明らかにされている (e.g., Guinote & Phillips, 2010)。とするならば、我々は如何なる他者に共感し、如何なる他者には共感を示さないか、そしてそれがこの社会においてどのような意味をもつのか、それを問わなければならない。

本稿では、まず私たちの生きている今のこの社会がどのようなものであるかを述べ、次にそのような社会に生きる人々にどのように共感が作用するのかを考えると、共感が諸刃の剣となりうるものであることを論じ、特集「社会的共生と感情」に寄せる稿としたい。

## 1. 現代：グローバル化社会と異質な他者の存在

言い古された表現であるが、人は一人では生きられない。誕生から死に至るまで人は常に社会的存在である。社会の厳密な定義は筆者の手に到底負えるものではないが、複数の人々がさまざまな相互作用を通して、影響を与え与えられているその複雑な全体的現象、としておこう。アフリカ東部の地に小規模集団で暮らしていた人類の黎明期から今日に至るまで、いつの時代にも人は一貫して人々と共に生きてきた。その意味では、人が社会的存在であることは不変の事実と言える。

しかし、社会的存在というときの社会がいかなるものかと問うのはとても重要である。上述したように、社会とは人々が相互作用を通して影響し合う全体的現象である。社会には制度や相互作用の様態、枠組みであるところの社会構造があり、それは歴史的に変化し続けてきた。人口、政治体制、産業、交通や通信手段などの発明などは人々の暮らしを変え、どのような人々とどのように相互作用するかを大きく方向づける。古い時代には、ごく一部の例外を除いて、人々は基本的に生まれ落ちた土地で育ちそこを離れることなく生涯を終えるのが一般的であった。そのような暮らしにおいては、周囲の顔見知りの人々と直接相互作用が行われた。まれに旅人が遠隔地の情報をもたらすことがあっても、その他地の人と情報を伝え聞いた人の生はそれぞれ独立に営まれており、人々の暮らしにほとんど影響をもたなかったであろう。人々はいわゆる共同体に包まれた生に終始したのである。言い換えれば、他者とは言語、宗教、習慣、価値観など暮らしの種々の次元において等質的な人々を意味し、社会はそのような人々によって構成されていた。

ふつうの人々にとって、見知らぬ他者との相互作用が増えるのは都市が出現してからとなる。都市では市が立ちモノや情報が行き交い、外の世界との新たな交流が生じる。ただ、移動交通手段の制約から、その規模は中世になっても今日からすれば限定的であった。ヨーロッパであればヨーロッパ各地と地中海周辺、日本であれば国内にほぼ限られていた。その後時代とともに、徐々に相互交流の範囲と速度は増加の一途をたどったが、その進行はゆるやかであった。

1990年代後半以降いわゆる「グローバル化」と呼ばれる現象 (Ghemawat, 2007) が起き、ヒト、モノ、カネ、情報の流れはかつての国や大陸の境界を越えて、それまででない速さで地球規模で飛び交うことになった (e.g., Huntington, 1996)。製品やサービス、資本など経済領域で国境を越えることがそれ以前の交流の柱であったのに対し、今や欧州やアジアといった地域を越えて経済的非経済的領域を問わずヒトや情報が移動する事態が展開している (Freedman, 2006;

Ghemawat, 2007)。簡単に言えば、1つの大きな社会になり、政治・経済・文化・社会のあらゆる次元において、言語や価値観、文化や習慣などが異なる「異質な他者」との相互交流が不可避となったことを意味する (稲垣, 2004; 石戸, 2007)。そこではいろいろなことが予測困難で、不確実性が高まる。諸外国に比べて比較的均質的とされた日本社会においても、公共乗り物や居住区、食事の場、職場・学校で外国人と隣り合わせになったりすることはめずらしくなくもはや日常化しているとさえ言える。

「異質な他者」とは、言語や習慣などに根ざした物事の考え方や価値観の違う他者である。異質な他者との出会いは、自分あるいは自分たちの価値観を見直す契機ともなり、新たな創造を刺激する。これは今とくにビジネス界において積極的に評価されている (中原・溝上, 2014)。他方、「異質な他者」との交流は困惑や不満に結びつくことも多く (Fiske, Moya, Russell, & Beams, 2012)、摩擦が生じやすい。世界の各地で表面化している移民問題・排斥はその例である (宮島, 2006)。(この稿を脱稿しようとしているとき、パリで新聞社が襲撃され、それを受けて欧州各地で反移民運動が活発化していることが報じられた。)

人が「社会的存在」であることは人類の誕生以来不変だとしても、このように人々の相互作用の対象や様態は以前とは異なってきている。仲間で暮らすことが社会的存在ということの内容であった長く続いた時代から、「仲間」でない者とも相互作用を避けて通れないという意味の社会的存在になったのである。前述したようにグローバル化社会への評価はさまざまであるが、異質な他者は一部の特定の人々だけでなく、多くのふつうの人々にとっても相互作用の相手となりつつある。それによって、かつては「遠い異国にいる自分とは無関係の他者」だった人も、何らかの意味において自分と関連のある他者、ひょっとしたら知らないところで自分にも責任が発生する他者となったことになる。グローバル化を施策として積極的に推進しその速度を上げるべきか否かは別の議論として、現在既に1つの大きな社会であり今後もそうであるなら、異質な他者との共生共存はこれからの時代に向かって不可避の課題なのである。

## 2. 共感研究の知見

前述したように、一般に共感とは人の愛他性・道徳性を支え向社会的な望ましいものと考えられている。ミラーニューロン発見 (Lacoboni, 2009; Rizzolatti, Fadiga, Fogassi, & Gallese, 1996) 以降に盛んになった神経科学からのアプローチや比較行動学系の共感研究は、別個体である他者の痛みや苦悩などを感じ取る生物学的基盤が人間に元来備わっていると示唆した。人は共感の生物学的基盤を備えているがゆえに、苦境にいる他



者に気づくと自動的に共感が生起するようになっており、生まれながらに善であり道徳的存在だという主張 (e.g., de Waal, 2010; Keltner, 2009) もなされている。

では、現代社会において新たに我々の隣人となった「異質な他者」の感情や苦痛苦悩に対して、共感はどう働くか。ある研究では、ドアに挟まれている場面、皮膚に針を刺されている場面など疼痛関連刺激とそうでない刺激を実験材料として人の手足とわかる程度の部分的画像提示し、前者に対して見ている者の脳の痛み関連部分が反応することを示した (Jackson, Meltzoff, & Decety, 2005)。さらに後続の研究では (Jackson, Brunet, Meltzoff, & Decety, 2006)、自己、見知らぬ他者、そして人工物の疼痛条件を検討し、pain matrix にみられる反応は人工物に比べて自己と他者の類似性が高く、他者への視点取得が共感に関わっていると報告している。すなわち、自分とは異なる人間である他者の疼痛を我がことのように感じ取る神経的基盤があることが示されたのである。

しかし、対人認知において、人種、性、年齢や同盟関係などのサインは必須要件として自動的に符号化される (Cosmides, Tooby, & Kurzban, 2003; Fiske & Neuberg, 1990; Voorspoels, Bartlema, & Vanpaemel, 2014)。つまり、無色透明の中立的他者というものは存在せず、たちまち社会的カテゴリーの観点から分類される傾向がある。また、知覚者自身も、他者との関係において自己カテゴリー化され (Turner, 1987)、単なる「無垢な傍観者 (innocent bystander)」 (Hoffman, 2000) ではなく、対象者を自分とは同類仲間あるいは異質な他者と認定したりする。自分のものではない腕に刺された注射の画像に神経的反応があったとしても、それだけではその (部分的) 他者を仲間だと想定した結果なのか、あるいは「敵」と想定した結果なのかは明らかでない。

ある研究 (Avenanti, Sirigu, & Aglioti, 2010) は Jackson et al. (2005) と類似した身体部分画像を用いて同様の実験をおこなった。異なるのは、その画像から皮膚の色 (黒人の肌、白人の肌) が識別できるようにしたことである。これによって、実験刺激は「漠然とした他者」ではなくなり、知覚者と対象者の間に関係性が生じた (us vs. them)。その結果、異人種に対する疼痛反応は同人種に対するそれに比べて落差があり、内集団に対しては外集団に対するより強い共感が生じることが示された。共感の集団間バイアス (intergroup empathy bias; Cikara, Bruneau, & Saxe, 2011) と名付けられたこの落差は、白人参加者と黒人参加者のどちらにおいても確認されている。また人種 (Mathur, Harada, Lipke, & Chiao, 2010; Contreras-Huerta et al., 2013; Xu, Zuo, Wang, & Han, 2009) の他、政治的立場 (Mitchell, Macrae, & Banaji, 2006)、社会的カテゴリー (Cikara &

Van Bavel, 2014; Hein, Silani, Preuschhoff, Batson, & Singer, 2010) などさまざまな内集団・外集団で見いだされている。要するに、共感は自分と何らかの共通性を持ち好意を寄せることができるような他者、広い意味での自分の仲間 (we) に対して顕著な反応として現れるが、異質な他者 (they) に対する共感反応は限定的である。

さらに、外集団には共感をあまり示さないことに留まらず、その苦境にシャーデンフロイデ (Schadenfreude) (Cikara, Botvinick, & Fiske, 2011; Takahashi et al., 2009) を、幸運には面白くなさ (Glückschmerz) (Smith, Powell, Combs, & Schurtz, 2009) を示すことが報告されている。時には共感バイアスとは一見逆の現象、すなわち内集団よりも外集団に対して pain matrix がより強い活性化を示すことがある。しかしこれは共感というより、敵の動き・状態 (本当に苦痛を感じているかどうか) をつぶさに確認する必要があるからではないかと考えられている (Fox, Sobhani, & Aziz-Zadeh, 2013)。

### 3. グローバル化社会と共感

これらの知見を現代のグローバル化社会という文脈に据えてみよう。第一に、共感相手を選ぶ選択性を有し、広い意味での内集団バイアスを示す。つまり、共感窮状に立っている人すべてに対して起きるとは限らず、肌の色や価値観などを共有する「等質」な仲間に向けられるものであり、相手を選別し差別するという倫理的問題を伴う。

共感の選択性はまず相手が自分にとってどのような他者かを選別する。倫理学者吉川 (2014) は、以下のように述べている。『文字通りの空間的・時間的な直接性、同じルーツという家族的な結びつき、友人やパートナーにおける価値観や歴史などの分かち合いなどの要因が、共感に判断や決定を動機づける力を与える (Slote, 2007)。とすれば、直接に面識もなく、家族でもなく、友人でもない人びとに対して、われわれは共感できないのかもしれない。われわれは「遠く」の人びとに対して、どのようにして道徳的に振る舞うのだろうか。共感の感情が他者一般におよぶことを示さないかぎり、ケアの倫理はきわめて限定された射程しかもちえないだろう。』<sup>2</sup>。そして自分の範疇外と思う者に対しては時にはその苦境苦痛を感じ取ったうえでそこに喜びを覚える (Cikara, Bruneau, & Saxe, 2011)。すなわち、共感には内に向かってやさしさを提供すると同時に、外に向かっては冷酷非情ともなりうる諸刃の剣と化す。

<sup>2</sup> 吉川 孝 (2014) の論文題目は『共感の道徳的価値をめぐって—M. シェーラーにおける「ケアの倫理」の可能性—』である、ここでいうケアは共感と考えてよい。

共感の選択性限定性を取り立てて問題としないとする立場もあるだろう。大部分の人はそれぞれ友好関係にある家族や友をもち、各個人の親密圏内で相互に共感し援助やケアを与えあえば、その総和としての社会全体の福祉は向上するだろうと考えられるからである。しかし、小さな世界が閉じており相互に独立なときにそれはあてはまるが、グローバル化が進行した社会では共感もたらす深刻な問題の方が大きい。アマゾン奥地など一部の地域において今なお閉じた共同体で生きる少数の人々を例外として、一つの大きな複雑な社会では、ひよっとすると気づかないうちに自分は誰か見知らぬ一見共通点がありませんように見える他者と相互依存関係にあるかもしれない (Butler, 2004 本橋訳 2007)。「異質な」他者はどこか地理的遠方にいる全く無関係の他者ではなく、今日の社会では物理的距離にかかわらず交流相手であり隣人であり自分の生が依存している他者である。脳が自分サイドだと認めたがらない「異質な他者」を非人間化ないし非個人化し意味ある心の持ち主と認めず、神経的・行動的共感の対象外 (Fiske, 2009) としてしまうならば、このこと自体、人々の間に格差や差別ひいては新たな憎悪や対立葛藤を生むことにつながりはしないか。とくに、行動レベルの愛他行動において、限られた資源を共感する内集団に配分する傾向を生む (Brewer, 1999)。共感の集団間バイアスは、単に誰にまなごしを向けるかという問題にとどまらず、現実の社会に重大な影響をもつと考えられる。

加えて、今日の社会はセーフティネットとなる親密関係さえ十分に持てない／維持できない人々を作り出した (岩田, 2008)。そのような人々はしばしば他者の目から隠され (invisible)、発見されなければ (岩田, 2007) 存在しないのと同じ状態におかれている。これは1つの社会の中でもそうであるが、国際的に目が届かない地域もあり、それらの人々の苦境には共感が届きにくい。

第二に、共感の選択性はより強い意味において共存共生を阻むことがある。それは個人レベルより集団レベルのとき、共感バイアスが一層顕著になる (Cikara & Van Bavel, 2014) という知見と関連する。ベックは、グローバル化した社会はリスク社会であると主張する (Beck, 2002 島村訳 2010)。たとえば、近代の概念では戦争とは国家と国家の戦いであったが、こんにち国家という枠を越えた「暴力的ネットワーク」や単独行動による攻撃も発生し、安全安心が脅かされかねない状況にある。2001年9月11日に起きた「アメリカ同時多発テロ」は、それが現実であることを示している。この時米国は国民から多数の犠牲者をだし、米国民は「共感したテロリスト攻撃への悲嘆、恐怖、深い怒り」 (林, 2007) を共有することになった。そして、アフガニスタン紛争やイラク戦争を

開始し (NHK, 2011)、誤爆によってアフガニスタンの多数の一般市民を死者とした (BBC, 2002)。約10年後、米国はこの事件の首謀者とみなしたオサマ・ビン・ラディンを殺害した後、「オサマ・ビン・ラディンの死について」という大統領声明を発表した。以下はその中の一部分である：

The empty seat at the dinner table. Children who were forced to grow up without their mother or their father. Parents who would never know the feeling of their child's embrace. Nearly 3,000 citizens taken from us, leaving a gaping hole in our hearts. (White House, 2011).

ここには内集団の犠牲者の家族の悲しみが公的に聖なるものとして承認され、強い共感の対象となっていることが顕示され、同時に同じように愛する者を失った“敵”側の人々の悲しみは無視され共感の対象とはされていないことが暗示されている<sup>3</sup>。加えて、内集団の犠牲者への共感、仲間が抱えている恐怖・不安・悲しみへの共感が怒りや憤りや憎悪に変換されて外集団へ向けられ (アムネスティインターナショナル, 2007も参照)、攻撃の応酬の1つの要因となっていることが読み取れる。このように、今日の異質な他者を含めたより大きな1つの社会においては、仲間への共感には共存を阻む方向に行き着く場合があり、共感には「やさしさ」「あたたかさ」などを同義語とする、向社会的という特徴をもったものとするはできないのである。

異質な他者との共存にあたって、さまざまな違いを超えて一挙に調和的友好関係を成立させられるわけではないことは、近年のこうした世界情勢が示している。そして、“敵”に向けられた仲間の怒りや憎悪それ自体が共感の対象となり、それに異を唱える人々 (上の例では、アフガニスタン戦争に反対する人々) に対しては、形式上は内集団メンバーであっても中傷非難が向けられる (Butler, 2004 本橋訳 2007)。相手方も同じように仲間の犠牲や哀悼に対する共感から発して“敵”側の人々に同等の犠牲や痛みを求め報復するならば、暴力の連鎖・激化・長期化というネガティブサイクルが不断に回り続ける可能性は高まるばかりである。

冒頭に挙げた de Waal (2010 柴田訳 2010) の結論は、人間の「この生まれながらの能力 (共感のこと) :

<sup>3</sup> 筆者にとって、アメリカの国内の動向や大統領声明は報道を通じて情報として入手しやすい。他方アメリカがいう“敵”側の情報はほとんど入手困難であり、わずかな報道も憶測に基づく場合が多い。ここでの記述がアメリカ中心となっているのは、そのような理由による。報道バイアスについては遠藤 (2014) を参照されたい。

筆者補足)を活かせば、どんな社会も必ずやその恩恵に与するだろう (p. 316)」というものである。しかし、そこに至るまでのところで彼自身、「共感が内輪の協力を促すために進化した (p. 310)」として共感の選択性について触れ、「私たちが暮らすはるかに大きく複雑な世界では動物の共同体や小規模な人間の社会を参照しても解決策は見えてこない (p. 315)」と述べている。だが、この1つの大きな複雑な世界と内輪の世界の相違に十分な考察を与えず、今の時代に共感がどのように機能するかについては具体的に何も述べることなく、上記の結論に至っている。本当は、その間をつなぐ議論こそが必要である。

#### 4. 最後に

本稿では、我々は如何なる他者に共感し、如何なる他者には共感を示さないか、そしてそれがこのグローバル化した社会においてどのような意味をもつのかを考えることを目的とした。共感親密圏の内側にいる他者あるいは自分サイドと認定しうる他者に対して手を差し伸べる暖かみで人生を有意義にする肯定的力をもつ。しかし、無条件にすべての他者に対して善良であるわけではない。人もそして他の霊長類も、他者が同盟関係を結ぶに値するかどうかに対して敏感であり、①社会的ないし遺伝的に近い者、②過去に協力的であった者、③自分が利用できそうな資源をより豊かにもっている上位の者に、協力行動をとる傾向がある (Tomasello, 2009; Zaki, 2014)。内集団を対象とする共感、相互依存関係にある相手の考えや感情を共有することによって、協力行動を促進する (de Waal, 2008)。そうであればあるほど、内集団は外集団との間に鮮明な線引きがなされ区別される。限られた資源をめぐる競争があるときはとくに (Tooby & Cosmides, 2010)、またそうでないときでも日常的に自分が内集団の境界の内側にいることを確認するのは同盟関係維持に役立つ (Dunbar, 1992)。外集団を埒外に置き内集団に共感する共感バイアスは、内集団帰属確認がもたらす感情的動機づけの後遺症のようなものだ、と Zaki (2014) は論じている。

20世紀の終わり頃に急速に変化し誕生した1つの大きな世界、すなわちグローバル化した社会、今日の我々は生きているのはそのような社会である。しかし、地球上のすべての人々が全体として「内集団」という認識をもつことは難しい。実際には気づかないうちに自分と相互依存関係にあるかもしれない他者 (Butler, 2004 本橋訳 2007) を、習慣や容姿や信条などの相違から「外集団」と識別し共感の対象外とし、ときにはその不運に密かな喜びを感じることもさえない。その意味において共感に向社会的とは言いがたい。

では、「異質な他者」との共存共生という至要の課

題をどう解決すればよいか。難問でそう容易に解を見つけれないうえ紙幅も尽きることから、ここでは簡単に述べるに留めたい。1つには、共感や集団についての研究はもとより、歴史や文化、国際関係、紛争経済などさまざまな研究を総合的に見渡す学際的研究の推進によって人間の諸性質についての理解を深めるとともに、よりコスモポリタンの視野に立つ政治的ヴィジョンとそれを実現する社会システムの構築など (中村, 2014も参照)、共感ややさしさといった情緒だけに依存しない多方面からのアプローチが必要だと考える。心理学サイドにおいては、それらと絡みあうような生態学的妥当性の高い研究が求められる。

人命の喪失に悲しむべきものと、それに値しないものがあるのだ。どのような人間が哀悼されるべきで、どのような人間なら悲しみの対象になってはならないのか。その違いを決めるのはだれが人間の規範にはいるのかという排除の力学であって…。 (Butler, 2004 本橋訳 2007, p. 8)

#### 引用文献

- アムネスティインターナショナル (2007). グアタナモ収容所で何が起きているのか——暴かれるアメリカの「反テロ」戦争—— 合同出版
- Avenanti, A., Sirigu, A., & Aglioti, S. M. (2010). Racial bias reduces empathic sensorimotor resonance with other-race pain. *Current Biology*, **20**, 1018–1022.
- Batson, C. D. (1991). *The altruism question: Toward a social psychological answer*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Batson, C. D. (2009). These things called empathy: Eight related but distinct phenomena. In J. Decety & W. Ickes (Eds.), *The social neuroscience of empathy*. Cambridge, MA: MIT Press. pp. 3–15.
- BBC (2002). 7 September, 2002, 04:42 GMT 05:42 UK US justifies Afghan wedding bombing. <[http://news.bbc.co.uk/2/hi/south\\_asia/2242428.stm](http://news.bbc.co.uk/2/hi/south_asia/2242428.stm)> (2014.12.22).
- Beck, U. (2002). Das Schweigen der Wörter: über Terror und Krieg. Suhrkamp.
- (島村賢一 (訳) (2010). 世界リスク社会論 テロ、戦争、自然破壊 ちくま学芸文庫)
- Brewer, M. (1999). The psychology of prejudice: Ingroup love or outgroup hate? *Journal of Social Issues*, **55**, 429–444.
- Butler, J. (2004). *Precarious life: The power of mourning and violence*. London: Verso.
- (本橋哲也 (訳) (2007). 生のあやうさ——哀悼と暴力の政治学—— 以文社)
- Cikara, M., Botvinick, M. M., & Fiske, S. T. (2011). Us versus them social identity shapes neural responses to intergroup competition and harm. *Psychological Science*, **22**, 306–313.



- Cikara, M., Bruneau, E., & Saxe, R. (2011). Us and them: Intergroup failures in empathy. *Current Directions in Psychological Science*, **20**, 149-153.
- Cikara, M., & Van Bavel, J. J. (2014). The neuroscience of intergroup relations: An integrative review. *Perspectives on Psychological Science*, **9**, 245-274.
- Contreras-Huerta, L. S., Baker, K. S., Reynolds, K. J., Batalha, L., & Cunningham, R. (2013). Racial Bias in Neural Empathic Responses to Pain. *PLOS ONE*, **8**, e84001.
- Coplan, A. (2011). Understanding empathy: Its features and effects. In A. Coplan & P. Goldie (Eds.), *Empathy: Philosophical and psychological perspectives*. Oxford: Oxford University Press. pp. 3-18.
- Cosmides, L., Tooby, J., & Kurzban, R. (2003). Perceptions of race. *Trends in Cognitive Sciences*, **7**, 173-179.
- Cuddy, A. J., Fiske, S. T., & Glick, P. (2008). Warmth and competence as universal dimensions of social perception: The stereotype content model and the BIAS map. In M. Zanna (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*, Vol. 40. San Diego, CA: Academic Press. pp. 61-149.
- de Waal, F. (2008). Putting the altruism back into altruism: The evolution of empathy. *Annual Review of Psychology*, **59**, 279-300.
- de Waal, F. (2010). *The age of empathy: Nature's lessons for a kinder society*. New York: Random House.  
(柴田裕之 (訳) (2010). 共感の時代へ——動物行動学が教えてくれること—— 紀伊國屋書店)
- Dunbar, R. I. M. (1992). Neocortex size as a constraint on group size in primates. *Journal of Human Evolution*, **22**, 469-293.
- Eisenberg, N., & Miller, P. (1987). The relation of empathy to prosocial and related behaviors. *Psychological Bulletin*, **101**, 91-119.
- Eisenberg, N., Spinard, T., & Sadovsky, A. (2006). Empathy-related responding in children. In M. Killen & J. Smetana (Eds.), *Handbook of moral development*. Mahwah, NJ: Erlbaum. pp. 517-549.
- Eisenberg, N., & Strayer, J. (1987). Critical issues in the study of empathy. In N. Eisenberg and J. Strayer (Eds.), *Empathy and its development*, Cambridge: Cambridge University Press. pp. 3-13.
- 遠藤由美 (2014). 社会的文脈から共感を考える 梅田 聡 (編) 岩波講座 コミュニケーションの認知科学2 共感 岩波書店. pp. 79-99.
- Fiske, S. T. (2009). From dehumanization and objectification to rehumanization: Neuroimaging studies on the building blocks of empathy. *Annals of the New York Academy of Sciences*, **1167**, 31-34.
- Fiske, S. T., Moya, M., Russell, A. M., & Beams, C. (2012). The secrete handshake: Trust in cross-class encounters. In H. R. Markus & S. T. Fiske (Eds.), *Facing social class: How societal rank influences interaction*. New York: Russell Sage Foundation. pp. 234-252.
- Fiske, S. T., & Neuberg, S. L. (1990). A continuum model of impression formation, from category-based to individuating processes: Influence of information and motivation on attention and interpretation. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*, Vol. 23. New York: Academic Press. pp. 1-74.
- Fox, G. R., Sobhani, M., & Aziz-Zadeh, L. (2013). Witnessing hateful people in pain modulates brain activity in regions associated with physical pain and reward. *Frontiers Psychology*, **4**, 772.
- Freedman, T. (2006). *The world is flat: A brief history of the twenty-first century*. Holtzbrink Publishers. (伏見威蕃 (訳) (2006). フラット化する世界 (上) (下) 日本経済新聞社)
- Ghemawat, P. (2007). *Redefining global strategy: Crossing borders in a world where differences still matter*. Boston: Harvard Business School Press.
- Guinote, A., & Phillips, A. (2010). Power can increase stereotyping: Evidence from managers and subordinates in the hotel industry. *Social Psychology*, **41**, 3-9.
- 林 敏彦 (2007). 米国同時多発テロと犠牲者補償基金 安全安心社会研究所ワーキングペーパー WP-2007-002 <<http://www.hemri21.jp/kenkyusyo/katsudo/pdf/wp2007002j.pdf>> (2014.12.22).
- Hein, G., Silani, G., Preuschoff, K., Batson, C. D., & Singer, T. (2010). Neural responses to ingroup and outgroup members' suffering predict individual differences in costly helping. *Neuron*, **68**, 149-160.
- Hoffman, M. L. (2000). *Empathy and moral development: Implications for caring and justice*. New York: Cambridge University Press.  
(菊池章夫・二宮克美 (訳) (2001). 共感と道徳性の発達心理学——思いやりと正義とのかかわりで—— 川島書店)
- Huntington, S. P. (1996). *The clash of civilizations and the remaking of world order*. New York, NY: Simon & Schuster.  
(鈴木主税 (訳) (1998). 文明の衝突 集英社)
- 稲垣久和 (2004). 宗教と公共哲学——生活世界のスピリチュアリティ—— (公共哲学叢書) 東京大学出版会
- 石戸 光 (2007). 地球規模の公共経済哲学を見据えて——異質な他者との対話の可能性—— 公共研究, **4**, 105-122.
- 岩田正美 (2007). 現代の貧困 ワーキングプア／ホームレス／生活保護 ちくま新書
- 岩田正美 (2008). 社会的排除 有斐閣
- Jackson, P. L., Meltzoff, A. N., & Decety, J. (2005). How do we perceive the pain of others? A window into the neural processes involved in empathy. *Neuroimage*, **24**, 771-779.
- Jackson, P. L., Brunet, E., Meltzoff, A. N., & Decety,

- J. (2006). Empathy examined through the neural mechanisms involved in imagining how I feel versus how you feel pain. *Neuropsychologia*, **44**, 752-761.
- 川崎惣一 (2009). 道徳的行動の主たる要因としての共感について 北海道教育大学紀要人文科学・社会科学編, **60**, 15-27.
- Keltner, D. (2009). *Born to be good: The science of a meaningful life*. New York: Norton.
- Krebs, D. (1975). Empathy and altruism. *Journal of Personality and Social Psychology*, **32**, 1134-1146.
- Lacoboni, M. (2009). Imitation, empathy, and mirror neurons. *Annual Review of Psychology*, **60**, 653-670.
- Mathur, V. A., Harada, T., Lipke, T., & Chiao, J. Y. (2010). Neural basis of extraordinary empathy and altruistic motivation. *NeuroImage*, **51**, 1468-1475.
- Mitchell, J. P., Macrae, C. N., & Banaji, M. R. (2006). Dissociable medial prefrontal contributions to judgments of similar and dissimilar others. *Neuron*, **50**, 655-663.
- 宮島 喬 (2006). 移民社会フランスの危機 岩波書店
- 中原 淳・溝上慎一 (2014). 活躍する組織人の探求——大学から企業へのトランジション—— 東京大学出版会
- 中村 真 (2014). 共感と向社会的行動——集団間紛争の問題を通して考える—— 梅田 聡 (編) 岩波講座 コミュニケーションの認知科学2 共感 岩波書店. pp. 139-165.
- NHK (2011). クローズアップ現代WEB特集No.3 9.11あの日から10年 クロ現が見つめ続けた世界の変貌 <[http://www.nhk.or.jp/gendai/special/03\\_911.html](http://www.nhk.or.jp/gendai/special/03_911.html)> (2014.12.22).
- Preston, S. D., & de Waal, F. (2002). Empathy: Its ultimate and proximate bases. *Behavioral and Brain Sciences*, **25**, 1-20, discussion 20-71.
- Rizzolatti, G., Fadiga, L., Fogassi, L., & Gallese, V. (1996). Premotor cortex and the recognition of motor actions. *Cognitive Brain Research*, **3**, 131-141.
- Singh, R., & Tor, X. L. (2008). The reflective effects of competence and likability on interpersonal attraction. *Journal of Social Psychology*, **148**, 253-255.
- Slote, M. A. (2007). *The ethics of care and empathy*. New York: Routledge.
- Smith, A. (1759). *The theory of moral sentiments*. Economic Classic. Gutenberg Publishers.  
(高 哲男 (訳) (2013). 道徳感情論 講談社)
- Smith, R., Powell, C., Combs, D., & Schurtz, D. (2009). Exploring the when and why of schadenfreude. *Social and Personality Psychology Compass*, **3**, 530-546.
- Takahashi, H., Kato, M., Matsuura, M., Mobbs, D., Suhara, T., & Okubo, Y. (2009). When your gain is my pain and your pain is my gain: Neural correlates of envy and schadenfreude. *Science*, **323**, 937-939.
- Tomasello, M. (2009). *Why we cooperate*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Tooby, J., & Cosmides, L. (2010). Groups in mind: The coalitional roots of war and morality. In H. Høgh-Olesen (Ed.), *Human morality & sociality: Evolutionary & comparative perspectives*, New York: Palgrave MacMillan. pp. 91-234.
- Turner, J. C. (1987). *Rediscovering the Social Group: A Self-categorization Theory*. Oxford & New York: Blackwell.
- (蘭 千寿・内藤哲夫・磯崎三喜年・遠藤由美 (訳) (1995). 社会集団の再発見——自己カテゴリー化理論—— 誠信書房)
- 梅田 聡 (2014). 共感の科学——認知神経科学からのアプローチ—— 梅田 聡 (編) 岩波講座 コミュニケーションの認知科学2 共感 岩波書店. pp. 1-29.
- Voorspoels, W., Bartlema, A., & Vanpaemel, W. (2014). Can race really be erased? A pre-registered replication study. *Frontiers in Psychology*. Advanced online publication. doi: 10.3389/fpsyg.2014.01035
- White House (2011). President Obama on death of Osama bin Laden. <<http://www.whitehouse.gov/blog/2011/05/02/osama-bin-laden-dead>> (2014.9.25).
- Xu, X., Zuo, X., Wang, X., & Han, S. (2009). Do you feel my pain. Racial group membership modulates empathic neural responses. *Journal of Neuroscience*, **29**, 8525-8529.
- 吉川 孝 (2014). 共感の道徳的価値をめぐって——M. シェーラーにおける「ケアの倫理」の可能性—— 行為論研究, **3**, 37-50.
- Zaki, J. (2014). Empathy: A motivated account. *Psychological Bulletin*, **140**, 1608-1647.